昭和49年8月1日発行（毎月1回1日発行）第23巻・第8号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号　昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

川崎
5式戦闘機

☆特集☆
カメラ・ルポ　沖縄の南西航空混成団
アメリカの伝統をやぶるF-15戦闘機
アメリカで復元したBf109G戦闘機

'74 AUGUST 8

$3.30

沖縄の南西航空混成団

JASDF Nansei (southwest) Combined Air Wing, Okinawa.

F-104J/DJs of 207th TFS at JASDF Naha AB, 20 May 1974.

⬇左翼下面にダート・ターゲットとFTQ-4リールを装着した第207飛行隊のF-104J 579号機。

F-104J of 207th TFS, JASDF.

⬆同じくIRホーミング・ミサイル用のDF-6MFQフレアデルマー・ターゲットを装着したF-104DJ 008号機。

⬇陸上自衛隊第1混成団第101飛行隊のKV-107-II-4。

KV-107-II-4 of 101st Sqdn, JGSDF.

LM-1 of 101st Sqdn, JGSDF.

⬆同じく第101飛行隊のLM-1連絡機。

“ブルーエンゼルス”の新鋭スカイホーク

McDonnell Douglas A-4F Skyhawk of U.S. Navy Blue Angels, NAF Washington D.C. 18 April 1974 (Photo by Lt. J.G. Handleman)

ハノーバー・ショーのアルファジェット

今春のハノーバー航空ショーに展示されたアルファジェット原型1号機。アルファジェットはすでに原型1－3号機が初飛行してテスト飛行を行なっており，今秋には4号機も飛ぶ予定である。

Dornier/Dassault-Breguet Alpha Jet 01 at 1974 Hanover Air Show. (Photo by J.P.Poelstra)

エドワーズ基地のクルーセイダー研究機

エドワーズ空軍基地のNASA（米航空宇宙局）フライト・リサーチ・センターで研究テストに使われている２機のクルセイダー。

F-8C adopting fly-by-wire control system.

⬆アポロ宇宙船のコンピューターを応用したフライバイワイア（FBW）式の操縦装置を

胴体に描かれた電光マークはFBWを象徴するもの。

⬆アポロ宇宙船のコンピューターを応用したフライバイワイア（FBW）式の操縦装置をつけたF-8C。1972年5月25日に最初の飛行を行ない、昨年中にフェーズIAのテストを終えて、今年からはエレクトロニクス系統を3重にするフェーズIBのテストに入っている。胴体に描かれた電光マークはFBWを象徴するもの。

⬇遷音速での巡航飛行を可能にするスーパー・クリティカル翼をつけたクルーセイダー。現在F-111の1機もこの翼型装備機に改造されて、一緒にテストが行なわれている。

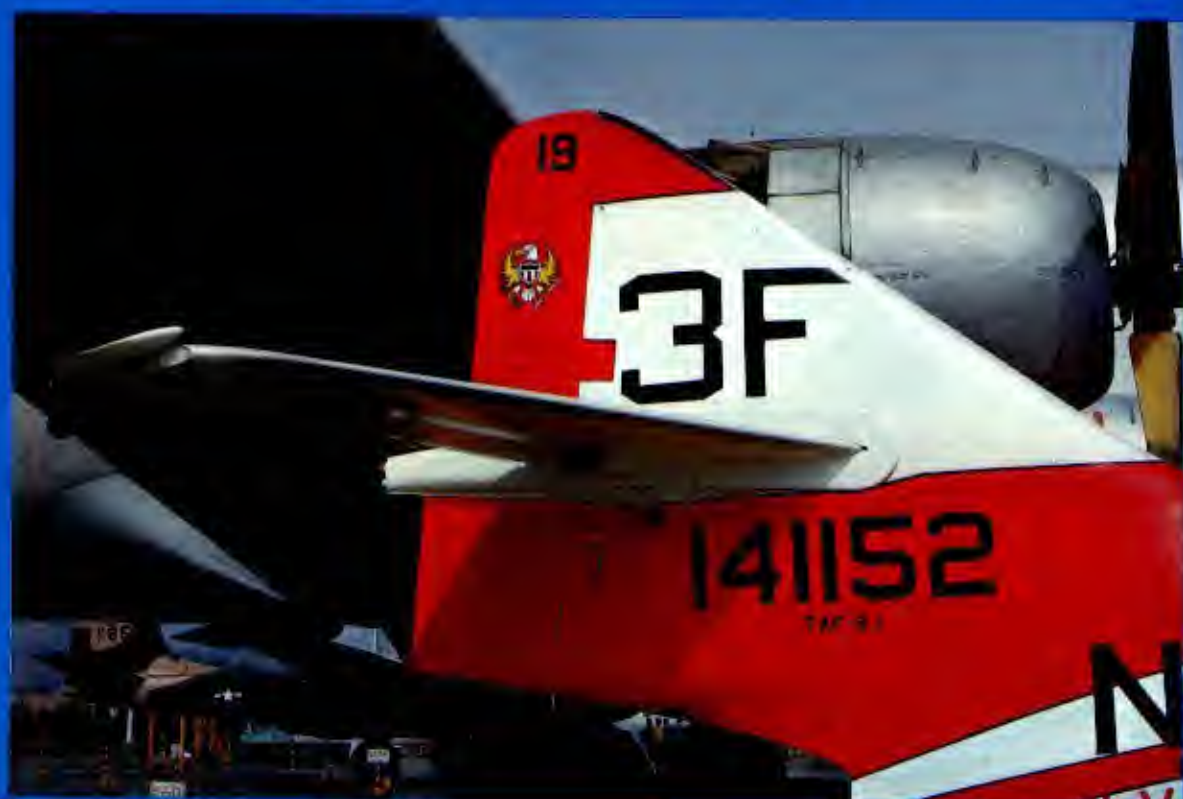
Two experimental Crusaders at NASA Flight Research Center, Edwards AFB

YF-16原型2号機　USAF/General Dynamics YF-16, Prototype No.2.

去る5月9日、エドワーズ空軍基地で55分間の初飛行に成功したジェネラル・ダイナミックスYF-16の原型第2号機。機体全面を米空軍の制空迷彩色と呼ばれるスカイブルーとクラウドホワイトの迷彩に塗っているため、1号機とはまったく印象が異なっている。

★レベル 1/32スケール名戦闘機シリーズ★
ジャンプ・ジェット
ホーカー シドレーハリアー
1/32ジェットファイターシリーズは、第1弾"ビッグ・ファントム"、第2弾"ミラージュ"第3弾"ハリアー"とますます充実してきました。とくに"ミラージュ"と"ハリアー"のキットは、アクセサリーも豊富で各種の兵器や増槽がついていますので、いろいろなバリエーションが楽しめ、プロペラ機ファンも見逃せないビッグなモデルです。
-248 全長43.5cm 全幅24.2cm ¥1,800
Revell
プラスチックモデルは
レベル
グンゼ産業㈱レベル部
MARINES

韓国の"屋外航空博物館" ②

グラマンTAF-9Jクーガー

First prototype of MRCA (European Multi-role Combat Aircraft)

MRCA原型1号機 ↑
国内航空のDC-9-41 ↓

〔上〕4月8日にロールアウト，初飛行準備中のパナビア200MRCA原型1号機。7月号アート・ページと同じ写真だが，あえてカラーで再録。〔下〕去る3月にアメリカから到着，東京～釧路，東京～大分の路線に就航している国内航空の新鋭DC-9-41。

McDonnell Douglas DC-9-41 of Toa Domestic Airline.

TRAM装備のA-6Eイントルーダー

Grumman A-6E Intruder TRAM aircraft's first flight at Calverton, Long Island, NY, 22 Mar.

3月22日，ロングアイランドのグラマン社カルバートン飛行テスト場で初飛行に成功したTRAM装備のA-6E。A-6Eは現在生産に入っているイントルーダーの新型であるが，TRAM（目標確認攻撃複合センサー）システムは，さらに同機の性能向上をめざして試みられているレーザー誘導火器の管制装置。

S-3Aバイキングの空中給油テスト

Lockheed S-2A Vikings making air refueling tests.

この春に13機で最初の部隊が編成されて、実施部隊に配備されるロッキードS-3Aバイキング。空母フォレスタルを使っての艦上適性テストのほか一連の評価テストを受けているが、これは空中給油テストの模様。給油を受けているのはグラマンTF-9Jクーガーである。

ノースロップYF-17　1号機

The first of two prototypes of Northrop YF-17 lightweight fighter.

エドワーズ空軍基地でYF-16とともに飛行テストが始められているYF-17の1号機。この写真はロールアウトしたばかりのスナップ。本機はノースロップ社で自主開発をつづけているP.530コブラを基本としているが，この角度の写真では，そのコブラの名称の由来となった機首両側にエラのようにのびた主翼前縁の整形部がよくわかる。

飛行テスト中のYF-16　1号機

General Dynamics YF-16 lightweight fighter. Prototype No.1. It took off from Edwards AFB.

写真上・下ともエドワース基地で飛行テスト中のYF-16軽量戦闘機原型1号機。YF-16は，カラー・ページでごらんのように，すでに2号機もエドワーズでテストに入っている。写真では両翼端にAIM-9Jサイドワインダーを装備しているが，このほか地上攻撃用武器では，主翼下のパイロンに，Mk83爆弾（6発），KMU-351レーダ誘導爆弾（2発），AGM-65マーベリック・ミサイル（2基）などを装備する。

シンガポール向けのA-4S

A-4S Skyhawks produced for Singapore A.F.

米海軍のレムーア航空基地に勢ぞろいしたシンガポール空軍向けのA-4S。A-4SはA-4Bを改造したもので，シンガポール空軍では40機を装備する。A-4Bからの改造作業はロッキード・エアクラフト・サービス社のオンタリオとシンガポール工場で進められているが，写真の機体はオンタリオで完成した8機。乗員訓練のためにレムーアに運ばれたもの。

F-5EタイガーIIの最終組立工場

Northrop F-5E International Fighters, final stage of assembly at the company facility, Palmdale, Calif.

カリフォルニア州パームデールのノースロップ社工場で生産されているF-5EタイガーII，最終組立てショップの模様である。F-5Eはサウジアラビア空軍の30機，イラン空軍の141機，南ベトナム空軍の100機，ブラジル空軍の36機などすでに8カ国空軍から計500機以上の発注を受けており，ただいま月産10機の割合で生産が進められている。1975年までには月産20機と倍増される計画という。なおF-5Eの最初の20機は米空軍が保有して，エドワーズ基地で本機を装備する各国空軍の乗員の訓練にあてることになる。

西ドイツ空軍のOV-10Bブロンコ

Rockwell International OV-10B(Z) Bronco of West German A.F.

西ドイツ空軍が装備しているロックウェル・インターナショナルOV-10B(Z)ブロンコ。同空軍用のOV-10B(Z)は，写真のように主翼上面にGE製J85-GE-4エンジン(推力2,950lb)を1基装備しており，標的曳航用に使われている。同空軍では10機のOV-10B(Z)を発注しており，最初の2機は1970年に引渡された。なお主翼上のJ85エンジンの取付けは西ドイツで行なわれている。

(Photo: H. Redemann)

海上自衛隊のC-90と来日したA.300B

Beechcraft B65 of JMSDF

（上）5月26日の海上自衛隊徳島基地の公開日に展示されたビーチC90練習機。海上自衛隊ではビーチB65キングエアに代る計器飛行練習機として昨年3機を購入，国内で改造して第51航空隊に配備している。写真の機体は3号機である。後方に並んでいるのはB65。このほか当日はHSS-2，UF-2，MU-2S，T-34A，S2F-1，L-19，OH-6Jなどが展示された。　　　（Photo; H. Hanano）

（下）デモ飛行のため6月5日に来日したエアバスA.300Bの1号機。5月10日にツールーズを出発，クエート，オーストラリア，ニュージランド，タイ，フィリピン各地でデモ飛行を行ないながら来日したもの。日本には1週間滞在してデモ飛行を行ない，12日に香港からクアラルンプールに向けて出発した。

Airbus A-300B on demonstration leg, now at Tokyo International Airport

カメラ・ルポ

那覇基地のエプロンに勢ぞろいした第207飛行隊のF-104J戦闘機。同飛行隊にはこの他に複座型のF-104DJとT-33Aが数機配備されている。

那覇基地の南西航空混成団

Koku-Fan camera visits JASDF 83 AGp, 207 TFS, Okinawa.

第83航空隊第207飛行隊

2機編隊で離陸するF-104J。胴体下面にサイドワインダーAAMのランチャー，翼下に空対空ロ

第207飛行隊は当初百里基地の第7航空団に所属していたが、沖縄が本土に復帰後の1昨年11月に那覇基地に移動。現在F-104J18機、F-104DJを2機装備し、楳見崎飛行隊長以下連日訓練飛行にはげんでいる。

上の写真は翼下にロケット弾ポッドを装備して離陸するF-104J。離陸後機体は真青な空にすいこまれるように姿を消してゆく。訓練空域は沖縄本島南100～150マイルの海上。左は飛行を終えてエプロンに帰ってきたF-104J。

上はキャノピとその後の電子機器室のとびらを開いて整備中の機体。下は訓練飛行を終えて機から降りるパイロット。右は飛行記録をつけるパイロット。翼下に見えるのは2.75インチロケット弾が7発装備できるポッド。ロケット弾の訓練は、F-104DJの曳航するスーパーデルマ・ターゲットに向って発射し、ガンカメラによって命中の有無を確認する。

那覇基地は基地の半分が海に面している。そのため207飛行隊で使用している機体はすべて防錆塗装がされている。F-104の場合は主翼上面は白、機首レドームと、排気口近くのチタニウム合金製の部分を除いて、他は全面エアクラフト・グレイに塗られている。それでも表面が塩風にあたるので、格納庫うらには洗機場があり、ときどき機体の水洗を行なっている。

陸上自衛隊第１混成団

那覇基地には空自の南西航空混成団、海自の沖縄航空隊のほか、陸自西部方面隊に所属する第１混成団が駐留しており、陸海、空３自衛隊の共用基地となっている。第１混成団第101飛行隊にはＫＶ-107-II-４、ＨＵ-１Ｂの輸送ヘリコプタのほか連絡偵察用のＬＭ-１とＬＲ-１が配備されており、ＫＶ-107は通常型のほか洋上航法用にドップラー・レーダと大容量の燃料タンクを装備した新仕様の機体が含まれている。

このページの２枚は、第101飛行隊所属のＨＵ-１Ｂ。なおこれらの機体は、写真で見られるように機体を白、オレンジイエロー、オリーブドラブの３色で塗り分けている。

〔上〕ＫＶ-107-Ⅱ-4。この機体は通常のＫＶ-107-Ⅱ-4だが、第101飛行隊には燃料タンクを大型化するとともにドップラー・レーダ、ＵＨＦ送受信機を装備した機体が2機配属されていて、この仕様の機体は47会計年度に発注されたもので、昨年秋に同隊に引渡された。
〔中〕富士ＬＭ-1連絡機。胴体後部から生えているＪ/ＡＲＣ-Ａ3　ＶＨＦアンテナの形状がよくわかる。
〔下〕ＬＲ-1。ＫＶ-107-Ⅱと同様の塗装を施したＬＲ-1連絡／偵察機。

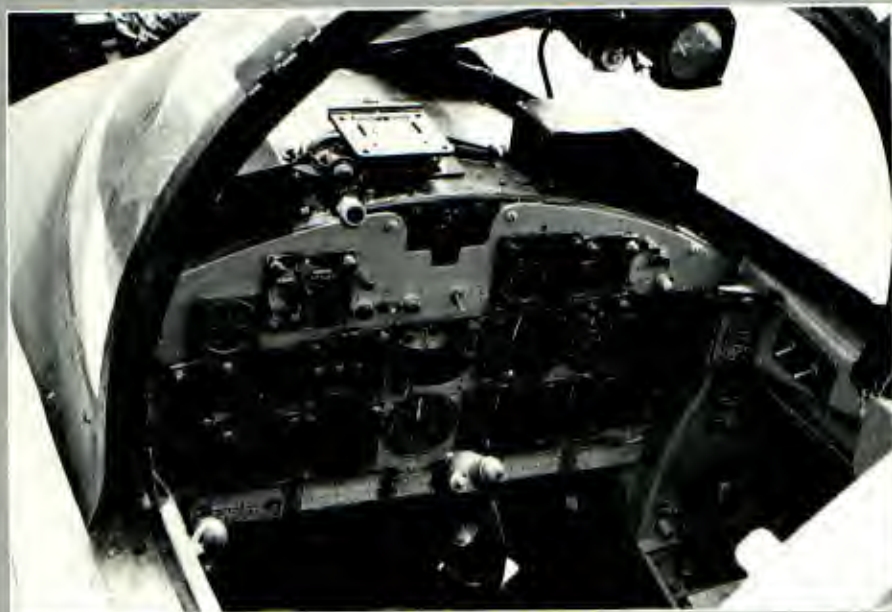
韓国の

クーガー

ソウル「5.16広場」の展示場

ソウル5.16広場の展示機は6、7月号でも紹介したが、今回は未公開のＴＡＦ-９Ｊクーガーをとりあげることにする。

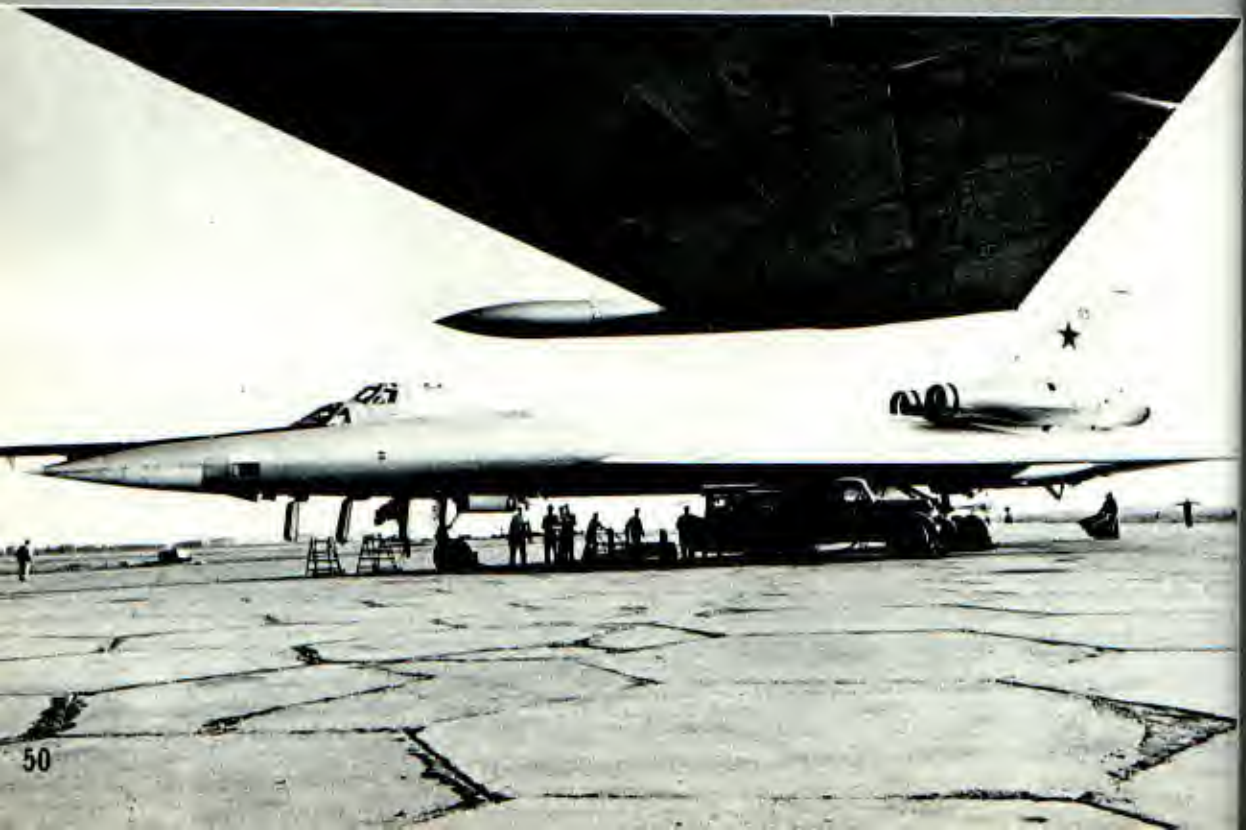
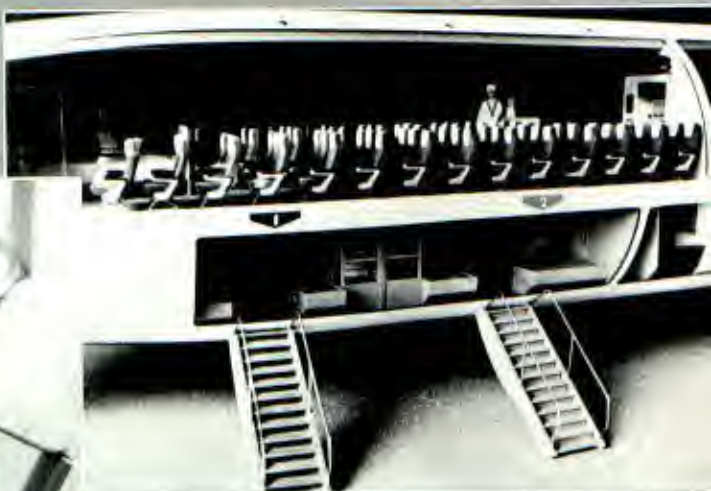
このＴＡＦ-９Ｊは、同広場の展示機の中ではＦ-86Ｄと並ぶ近代ジェット戦闘機であるが、また同時にそのハデないでたちから、広場を訪ねる観客の間で最も注目を集めている機体でもある。上の写真でわかるように、脚立が置いてあるためコクピットを見ることもできる。

このクーガーは当初、戦闘爆撃型のＦ９Ｆ-８Ｂ（ＡＦ-９Ｊ）として完成したが、後に改造を受けて練習型のＴＡＦ-９Ｊとなったもので、かつて同機を使用していたＶＴ-22の塗装に仕上げられている。右と下２枚は、いずれもＴＡＦ-９Ｊの計器盤。下右では姿勢方位指示器、速度計、回転計、油圧圧力計などが見えている。

〔上左〕機首の20㎜機銃口。機銃は装備していないが、機銃弾の給弾システムが見られるようになっている。
〔右〕は機首を前方にスライドさせて給油装置が見られるようにしたところで、A-26Kインベーダーも同様にガン・ベイを見ることができる。
〔下〕ではテイル・バンパーや尾部の燃料排出ベントなどに注意されたい。

フォートニュース

（上）ジェネラル・ダイナミックスYF-16 1号機。エドワーズ空軍基地でテスト中のスナップ。両翼端にAIM-9Jサイドワインダーを装備している。（アート・ページ、海外ニュース欄参照）（右）4月4日にロールアウトしたノースロップYF-17 1号機。6月号の表紙となった写真よりもやや上から見たもの。胴体両側のストレークなど、本機の平面形がよくわかる。

〔上〕飛行テスト中のアルファジェット原型1号機(01)と2号機（後方02）。1号機はフランスのブレゲー社で組立てられたもので、2号機は西ドイツのドルニエで完成した機体。アルファジェットはすでに西ドイツ空軍の攻撃型である原型3号機もフランスのイストル飛行場で初飛行を終えており、この秋にはフランス空軍用の練習型の4号機も飛行する予定である。（海外ニュース参照）

〔下〕飛行準備中のツポレフTu-22ブラインダー。ブラインダーには初期の偵察・爆撃型のA、キッチン・ミサイルを装備し、レドームを大きくしたB、カメラ6個を積んで胴部を改造したCと三つの型があるが、写真の機体は一段高く後方操縦席を設けた練習型である。

〔上・右〕ソ連で計画しているワイド・ボディ旅客機イリューシンＩℓ-86の完成模型。350人乗りで巡航速度は950km／hr、客室は９席配列で，昇降は下部の荷物室を通り、乗客席各自の荷物を自分で積み降せるというお国柄を示す新しいアイデアを採用。（TASS）

〔下・左〕ポーランドがソ連と共同で開発している新型農業用機M-15の完成模型。イフチェンコＡＩ-25ターボファン・エンジン（Ｙak-40旅客機と同型）を装備した複葉・双胴・双尾翼という変った外形。上翼と下翼を結ぶホッパの中に片側約1,100kmの農薬を積むことができる。燃料は上翼内のタンクに積み、乗員１人乗りだが、２人分のスペースがあり、乗客を１～２人乗せることもできる。胴体の設計はＡn-14を基にしているといわれる。Ａn-2の後継として造られる農業機。（ＴＡＳＳ）

〔上〕中東、インド方面をネットしているガルフ・エアは新しく“ゴールデン・ファルコン”サービスとしてロンドン－アラブ間を運航することになったが、写真はその路線に投入されるＶＣ-10。同航空では、これまでもＶＣ.10をリースして使っていたが、写真の機体は新路線のためにＢＡＣ社から購入した２機のうちの１機。

〔下〕勢ぞろいしたフランスの軽飛行機メーカー、ピエール・ロバンの製品。前方に3車輪式のＤＲ380プランス後方に尾輪式のＤＲ220／221ドーファンなどが並んでいる。

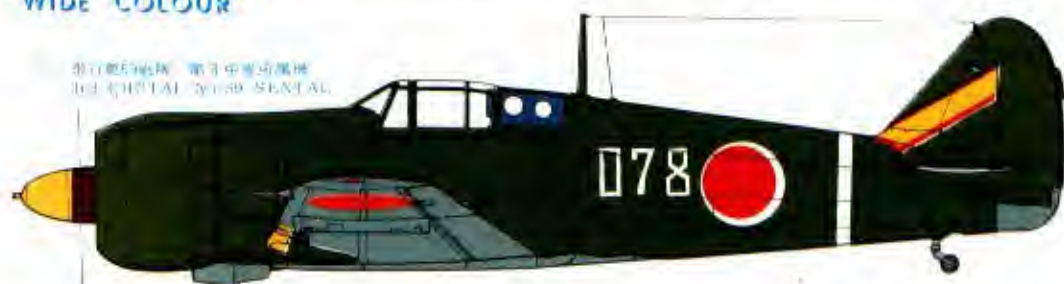
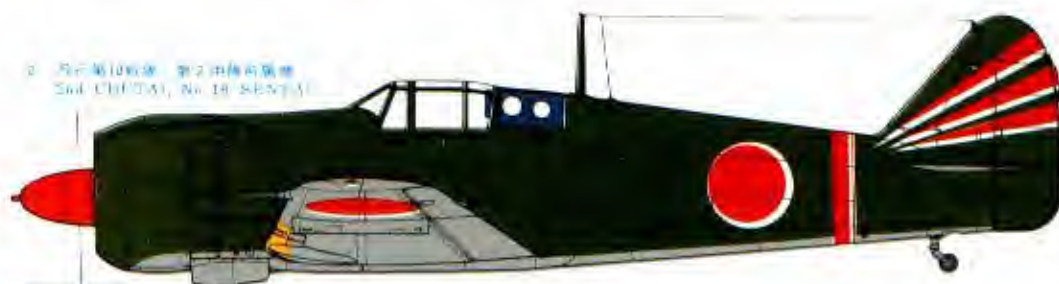
〔上〕カリフォルニア州レントンのボーイング工場で最終組立てに入っているサベナ・ベルギー航空向けのB.737-200。同航空では欧州路線用の10機の737-200を発注しており，写真の機体はその1番機。5月には完成して引渡されることになっている。

〔右〕アメリカのチャーター専業の航空会社ワールド・エアウエイズのボーイング747C。同社の装備機は747Cが3機のほかに，3機の707，6機の727，5機のスーパーDC-8で，すべて貨客両用型。貨物輸送に力を入れているチャーター運航会社である。

〔左〕ボーイング747SPの豪華なキャビン。SP型は東京からニューヨークまでノンストップで飛べるジャンボ・ジェットの長距離型で現在開発中。胴体は現用の標準よりも14.6m短かくなって，乗客数も100人ほど少なくなる。写真は前方入口から見たファースト・クラスのキャビンで，後方のパネル仕切壁の向うに調理室がある。中央のサービス・キャビネットの後方は化粧室。

スナップ だより

〔上〕厚木基地で撮影したＡ-6Ａイントルーダー。空母ミッドウェイ配属の第115攻撃飛行隊（アラブス・Arabs）の所属機。（藤沢市・遠藤尚）

〔上〕これもこのほど厚木基地に飛来したＴＡ-3Ｂスカイウォーリア。第１艦隊偵察飛行隊（ＶＱ-1）所属機。着陸の際に車輪がパンク、修理後滑走テストに向うときのスナップ。（東京都・竹内義久）〔下〕５月７日、羽田空港に飛来したヨルダンのアリア・ローヤル・ヨルダン航空のボーイング747。ヨルダンのハッサン皇太子を乗せて来日したもの。赤と金のハデな塗装。（武蔵野市・井上哲雄）

アメリカで復元されたBf.109G

Messerschmitt Bf109G reborn, to be on exhibit on July 4, 1976 when NASM new building opens.

ワシントンの国立航空宇宙博物館は現在建設中の新館がまもなく完成。1976年7月4日にオープンするが，その新館への展示用に数多くの2次大戦機がぞくぞくと整備されている。写真のメッサーシュミットBf109G-6/R3もその1機で，メリーランド州シルバーヒルにある同博物館集積所のショップでこのほど復元が完了したばかりの"英姿"。アメリカでは，大戦中にろ獲あるいは終戦時に押収した多数のドイツや日本の軍用機を持ち帰って，ライトパタソンやフリーマン・フィールドで評価テストを行なっているが，このBf109Gもその1機であり，1948年に同集積所に運び込まれて以来，一度も公開されることなく保管されていたもの。Bf109は零戦とともにアメリカでもっとも人気のある2次大戦機。博物館のスターの誕生である。

（83ページ本文記事参照）

Messerschmitt Bf109G restored, ready to be displayed at a NASM new building.

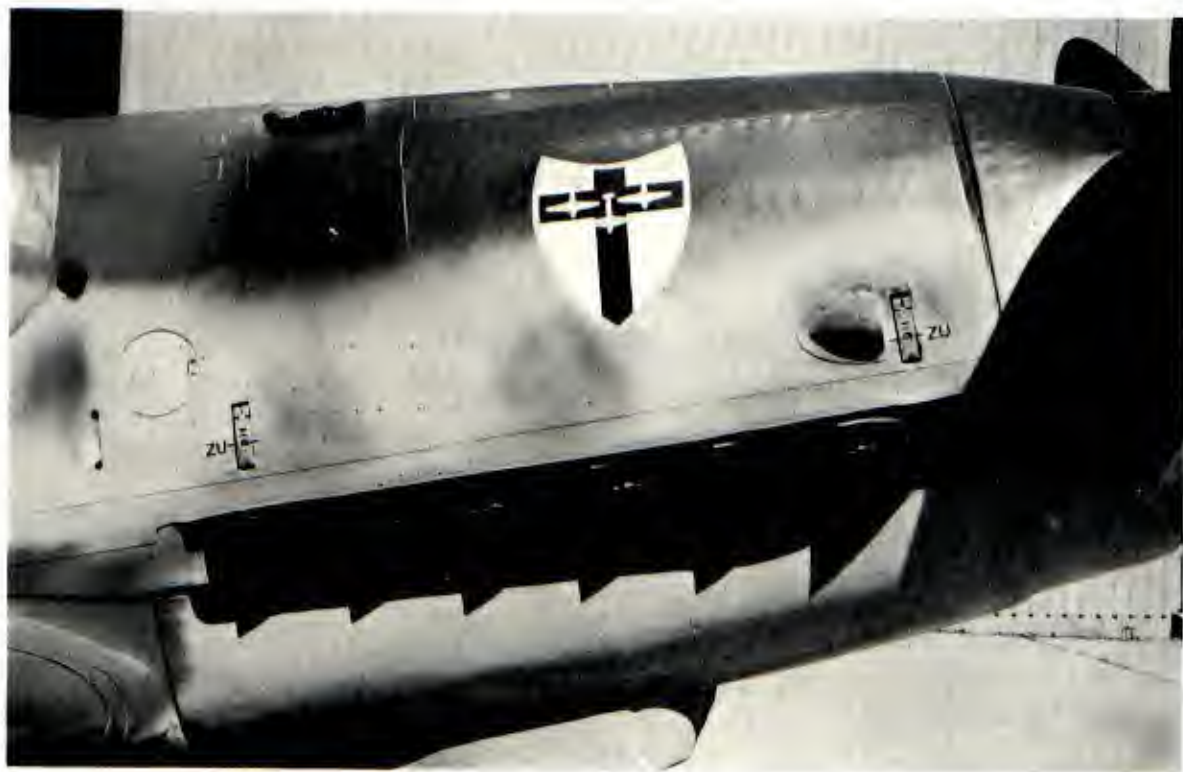
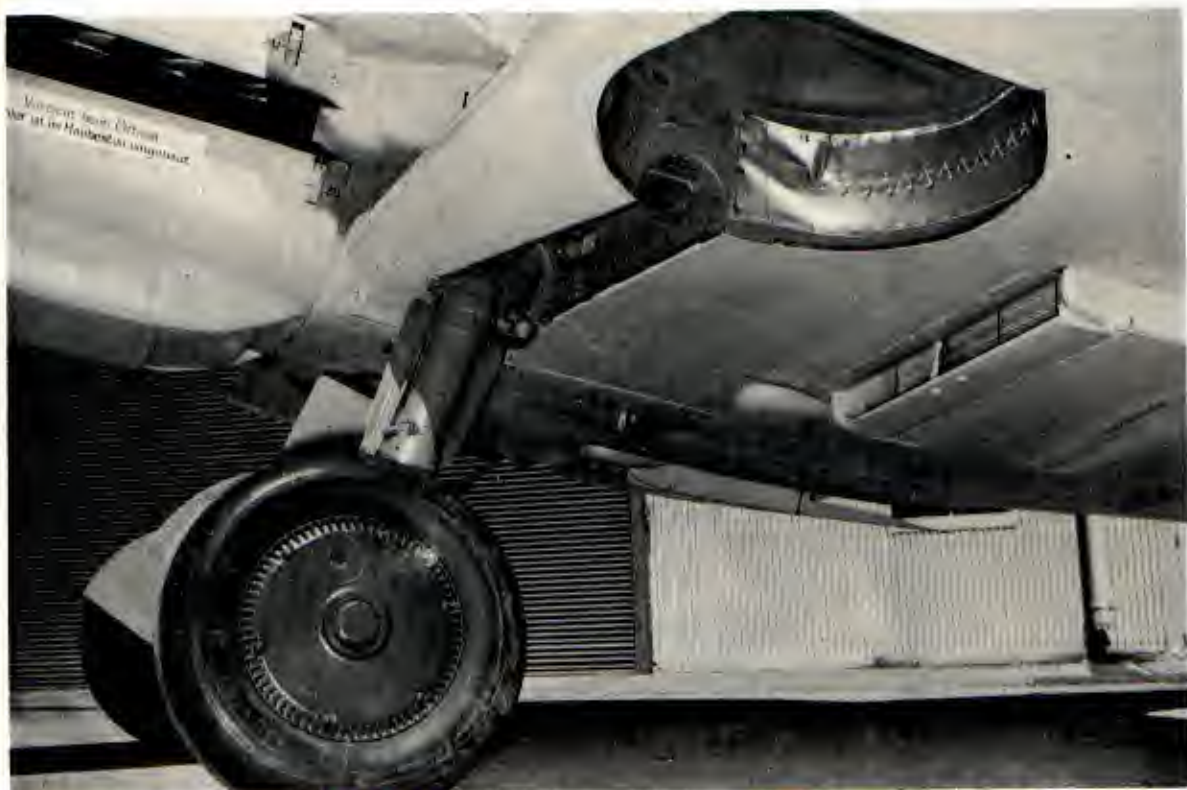
アメリカで
復元された
Bf109G

同集積所に保管されていたもの。来歴の詳細は不明であるが，機体塗装は第27戦闘航空団第3連隊（III/JG27）のものにしている。
[Photos by R. C. Mikesh]

このBf109Gの復元計画は83ページ本文記事に詳しいように，2年前の1972年夏にスタート，完了までに6,200マンアワーをつぎ込む大仕事であった。部品1個もゆるがせにしない精密，精緻をきわめた本格的な復元作業。残念ながら飛行は不可能であるが，当時の面影をもっとも忠実に残す“グスタフ”である。写真上と下は，シルバーヒルの整備ハンガー内でエンジン・カバーをはずして復元中のもので，主翼両端もはずされている。主車輪，尾輪とも支柱で支えられているのに注意。これが前ページやカラー写真のように，すばらしい姿に生まれ変ったのであるから驚きである。本機のエンジンはダイムラー・ベンツDB605AM（離昇1,475hp）であった。

復元されたBf109G-6の操縦席。この機体は米軍の評価テストが終ったのちに、しばらくのあいだイリノイ州のオヘア・フィールドに保管されていた。同フィールドからこの博物館に持ち込まれたときには、操縦桿はもとのままであったが、計器パネルの計器類はほとんどはずされていた。復元作業ではこの計器の入手になみなみならぬ苦心をしていることは本文記事のとおりである。はめ込まれた計器類はすべて、ほかのBf109に付けられていたもので、コクピット内もほぼ完全に再現されているといえる。

111ページからこのページは，シルバー・ヒルで復元したBf109G-6/R3をいろんな角度から見たもの。ごらんのようにすばらしい仕上りで，塗装も本文記事にあるようにいろんな資料をあさって，忠実に復元している。同機は1976年4月1日から開館されるワシントンの“ナショナル・エアー・アンド・スペース・ミュージアム”の新館に展示される。

写真上は復元途中の操縦席内部。シートの縛帯など操縦席内の一部が見えるが，ごらんのようにめちゃめちゃの状態で，作業の第一歩はこの操縦席内をきれいにかたずけてみがきあげることであった。写真下は塗装もきれいに仕上って復元が完了したBf109G-6の機首。第27戦闘航空団第3連隊（III/JG27）のエンブレムがつけられている。

Bf109G-6は爆撃機迎撃のために，プロペラ・ハブを通して発射する機関砲を20mmのMG151から30mmのMk108に換装強化した型であった。このため対戦闘機空戦では，やや性能が低下したが，爆撃機相手では大いに威力を発揮している。ただしこの30mmMK108機関砲の供給が充分でなく，20mm機関砲のままにしていたG-6もあった。今度復元された機体では，機関砲架がなくなっており，このいずれの砲を装備していたものかはっきりしないため，プロペラ・ハブの砲はまだ装備していないという。そのほかの機首の13mmMG131機銃2挺は，もとのままに取りつけられている。

写真上は主車輪，右は尾輪のクローズアップ。機体下面のオイルクーラーもきれいに整形され，各部に書かれた文字も忠実に再現されているのに注意。

① P-40K。第14空軍米中混成連隊の所属機。撃墜マークの前は搭乗者エドワード・ホルメイヤー少佐の文字。
Flown by Major Edward Hollmeyer of Chinese American Composite Wing, 14th A.F.

② 標準の塗装例。
An example of painting

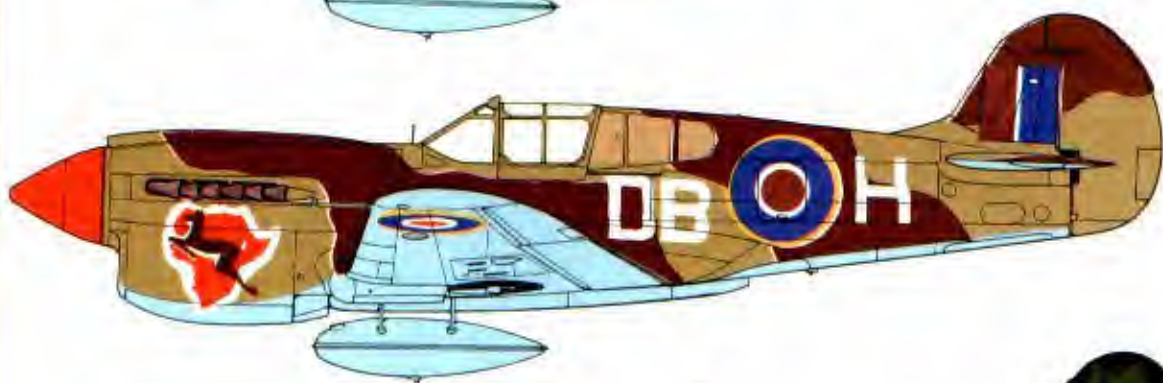
③ P-40F。第12空軍第325戦闘大隊第317戦闘中隊所属機。
"Duchess of DurhamN" of 317FS 325F.G., 12th A.F.

④ キティホークIII。南アフリカ空軍第2スコードロン（フライング・チータ）所属機。
Kittyhawk Mk.III of No.2 "Flying cheetah" Sqdn., SAAF.

⑤ P-40N。第10空軍第80戦闘大隊第85戦闘中隊所属機。ビルマ方面で使用された機体。
85FS 80F.G., 10th A.F.

P-40Eの改造

ハイモデリングのための

レベル資料集

カーチスP-40E/F/K/N

WARHAWK/KITTYHAWK

☆キット紹介☆

レベルから発売されているP-40のキットは1/32スケールのP-40Eフライングタイガーがあり，P-40の傑作として定評のある豪華版である。また1/72スケールでもP-40Eウォーホークのキットを発売中で，このキットもなかなか素晴しい仕上りを示すものであるのは，ご存知のとおりであるが，さらに新しく1/144スケールのミニ・キットもあり，1/72のE型のスケール・ダウン・モデルとして充分に楽しめるミニ・ミニプレーンである。

今月は，これらのE型を改造してさらにバリエーションを楽しもうというお話し。

☆塗装と改造☆

図①　第14空軍の所属機でP-40K。この機体を作るには，垂直尾翼前縁の幅を図のように広くしてヒレを追加すればよく，アンテナ柱を取って，新しくループアンテナを自作すると可能となる。レベルのE型キットから比較的楽に改造できる。塗装はダークグリーン㉓とダークアース㉒の迷彩と推定される。下面はニュートラルグレー⑬，平面の迷彩パターンは図②と同ようのものである。

図③　P-40Fで第12空軍の所属機。E型からの改造は機首上部のエアインテーク・ダクトを削り取って，カウルフラップの位置を前進させ，図のような形にするとF型となる。塗装は上面がダークアース㉒とミドルストーン㉑の迷彩で下面はアズールブルー㉞+①+③+㉚，垂直尾翼と水平尾翼は両面ともクロームイエロー㊿で黒のチェッカーつきとなっている。

図④　この機体もK型であるがループアンテナはなし。塗装は上面がダークアースとミドルストーンの迷彩で，下面はアズールブルー，機首のマークは，アフリカの地図は左右同じであるが動物のマークはそれぞれ前向きとなっている。翼下面のマークは黄フチつき。

図⑤　P-40Nの初期型で，E型から改造可能の機体。この改造は2個のキットが入用で，水平尾翼部胴体を残して垂直尾翼だけを切断し，別の垂直尾翼と胴体後半を接続するという改造法がある。塗装は上面がオリーブドラブ⑬で垂直尾翼と主翼，水平尾翼の前後縁に濃いダークグリーンのはん点があり，下面はニュートラルグレー。前部風防は左側だけに図のような枠が1本多くついている。排気管の前部へ小さい丸穴をつける改造もおわすれなく。

（イラストと解説・橋本喜久男）

← オーストラリア空軍のキティホークⅠa(A29-82)。上側面はダークグリーンとダークアースの迷彩，下面はスカイの塗装である。
Kittyhawk Ⅰa of RAAF

↑ 1942年，アリューシャン列島のアンマク島の飛行場から発進するP-40E。第11空軍第343戦闘大隊第11中隊の所属機。機首には有名な"ベンガル・タイガー"の顔が画かれている。
P-40E of 343FG, 11 FS, 11 AF

Kit :
Koku Fan readers are privileged today to enjoy P-40 variations by using P-40E kits from Revell. The 1/32 scale P-40E Flying Tiger is so popular among plastic kit model builders that no explanation is necessary, while the 1/72 scale P-40E Warhawk kit is widely known because of its splendid finish. Revell has also placed recently on sale a lovely 1/144 E-version kit.

Painting & Remodeling :
Fig. 1. P-40K of 14th Air Force. As shown in the figure, enlarge the vertical tail front edge and make the root wider. Take out the antenna strut and put a self-made loop antenna. No difficulty to remodel from Revell's E-version to K-version. Supposedly, this airplane was camouflaged in Revell Color (RC) 23, dark green and RC-22, dark earth. The bottom surfaces are RC-13, neutral gray. The camouflage pattern is shown in Fig. 2.

Fig. 2. P-40F of 12th Air Force. Remodeling from Revell's E-version to this version is done by moving the cowl flap, as illustrated, after cutting out the air intake and duct. It is camouflaged in RC-22, dark earth and RC-21, middle stone on the upper surfaces and in RC-34, 1, 3 and 30 azure blue on the lower surfaces. The vertical tail and horizontal tail are RC-4, chrome yellow with black checker.

Fig. 4. This is also K-version, but no antenna. The upper surfaces are camouflaged in dark earth and middle stone, while the lower surfaces are azure blue. The map of Africa on the left side of the nose is equal to that on the right, and an animal on both sides looks ahead. The mark on the wing undersurfaces is border outlined in yellow.

Fig. 5. This is the initial version of P-40N. For remodeling E-version to this airplane, two E-version kits are necessary to prolong the rear part of the fuselage as seen in the figure. The upper surfaces are RC-12, olive drab, with dark green dots on the vertical tail, main wings, and the front and rear edges of the horizontal tail. The lower surfaces are neutral gray. Noted is that the windshield has an additional frame only on the left side front. Also care must be taken to a small hole in the exhaust tube front part.

(Illustration & Commentary by Kikuo Hashimoto)

Revell color for P-40 Painting :

RC-1	White	13	Red
4	Yellow	8	Silver
12	Olive drab	13	Neutral gray
21	Middle stone	22	Dark earth
23	Dark green	30	Flat base
33	Non-glare black	34	Sky blue
58	Orange yellow	28	Black iron

P-40 Warhawk of Flying Tigers, now belongs to "U.S. Confederat Air Force"

大戦中に中国戦線で日本の空軍機を相手に闘ったアメリカの義勇空軍"フライング・タイガース"所属の塗装にしたP-40ウォーホーク。アメリカの"飛行航空博物館"である「コンフェダレート空軍」が所有している機体である。

陸軍最後の傑作戦闘機

5式戦闘機

Ki.100-I fighters of No.59 Hiko-Sentai at Ashiya Airfield, Kyushu. Oct. 1945. (USMC photo)

故障が続出し、生産も思うにまかせなかった3式戦2型の液冷エンジンハ140を空冷のハ112に代えたのが5式戦闘機。実施部隊への配備は昭和20年春。一部は台湾に送られたが、ほとんど本土防空の各部隊に配備されて、B-29やその護衛戦闘機の迎撃に活躍した。大戦末期の出現で生産機数はわずかに390機。旋回性能に優れ、機材不足で編隊空戦がままならなかった戦闘機パイロットたちにとって、多勢を相手の迎撃戦ではかっこうのファイターであった。本土防空の水ぎわ作戦で一花咲かせた陸軍最後の制式戦闘機。海軍の紫電改と好対称の傑作機である。

〔123ページ〕調布を基地に“帝都”東京の防空に活躍した飛行第244戦隊の5式1型戦闘機。同戦隊は昭和20年4月に3式戦から本機への機種改変を開始、5月17日には沖縄決戦参加のため主力30機が調布から九州の知覧に進出、特攻隊の援護にあたった。写真は九州地区進出のため調布を発進するところのシーンである。〔上・下左・下右〕終戦まもなく、芦屋基地で処分を待つ飛行第59戦隊の5式1型戦闘機。同戦隊が5式戦を装備したのは20年6月上旬。芦屋を基地に北九州、阪神地区防空に活躍した。上の写真手前から2機目の脚カバーにはかぶとの絵、3機目の胴体には撃墜マーク（下右も同一の機体）が描かれている。昭和20年10月17日の撮影。

↑→Ki.100-I Type 5 Fighters of No.244 Hiko-Sentai, taking off Chofu Airfield, 17 May 1975, for advanced Chiran Airfield, Kyushu, from where they flew for an escort service of Special Attack units.

〔左ページ上2枚・上〕これも調布基地を発進、九州の都城へ向う飛行第244戦隊の5式1型戦闘機。主翼下に200ℓ増槽2個をつるしている。20年5月17日に調布を発った同戦隊は大阪を経由して18日太刀洗着、20日から都城、知覧基地に移動して特攻隊の直掩にあたった。同戦隊はその後敵艦上戦闘機に対しても組織的な空戦を展開、6月3日には知覧上空に来襲したF4Uコルセアを迎え撃って7機を撃墜、さらに7月15日には八日市に移ってF6Fヘルキャット10数機を撃墜している。温存されて散発的なB-29攻撃以外出動を押えられた大戦末期の5式戦部隊。244戦隊の戦果は、5式戦の対戦闘機空戦における優秀性を実証する貴重な記録でもある。

〔左〕124～125ページと同じく終戦後の20年10月に撮影した芦屋基地の5式1型戦闘機。飛行第59戦隊所属機であったもの。後方に3式戦が1機見える。

(USMC photo)

〔右・下2枚〕近距離哨戒や対潜作戦、連絡輸送に使われた愛知2式練習飛行艇（Ｈ９Ａ１）。13試小型飛行艇の名称で愛知が開発した双発飛行艇で、海軍から試作指示があったのは昭和14年1月、15年9月に試作1号機が完成したが、性能はかんばしくなく改修がつづけられ、制式採用になったのは大戦中の17年2月。製作機数は試作機3機を含めてわずかに31機。連合軍が日本本土近海に進攻した大戦末期には、250kg爆弾2発を積んで潜水艦攻撃に活躍しているが、本機は任務が地味なこともあって一般にはあまりなじみがなく、これまで写真が発表されることも少なかった。

ここの写真は戦後米軍が大村飛行場で押収した横須賀航空隊所属の21号機。テスト飛行のために海兵隊員が整備中のものである。機首の観測窓や操縦席・エンジンまわりなどの細部がこの3枚の写真でよくわかる。1945年9月23日の撮影。

Captured Navy Type 2 Training Flying-boat (H9A1) of Yokosuka Koku-tai ready to be flown by a group of USMC fighter pilots for a test. Omura Seaplane Base, 4 Oct 1945.

↑↓"Dead birds" disfigured by American bombing and a series of typhoons. Ten seaplanes including N1K1 fighter seaplane, A6M2-N fighter seaplane and F1M2 observation seaplane found devastated. Imajiku Seaplane Station, west of Fukuoka, Kyushu. 13 Oct. 1945.

〔上左・上右〕太平洋戦の全期間にわたって使われた愛知の傑作3座水偵、零式水上偵察機。米軍の空襲と台風によって破壊されたもので、1945年10月13日、進駐した米海兵隊写真班が福岡西方の今宿水上機基地で撮影したもの。浮舟支柱を合計8本とした11甲型（E13A1a)である。

〔左2枚〕上の2枚と同じ日に今宿水上機基地で撮影した海軍水上機。左中写真では水上戦闘機強風（N1K1)、零式水上観測機（F1M2）が見え、左下の写真ではさらに右端に2式水戦（A6M2-N）が映っている。この状態で、10機の水上機がこの基地で発見されている。尾翼のKEAは第901航空隊所属機を示す。

Wrecked E13A1a recon. seaplanes and broken hangers. Tateyama Seaplane Station, 9 Oct. 1945.

終戦約1カ月後、昭和20年9月12日の館山航空基地。破壊されたハンガーと米軍のジープ。プロペラがはずされたばかりで無傷の零式水上偵察機も2機が映っている。

〔上・下〕終戦時の大津航空基地。94式2号水上偵察機が翼をつらねている。各機ともプロペラははずされているが、完全な状態で地上に爆弾もそのまま、上の写真には爆弾搭載用のドリーも見える。94式2号水偵（E7K2）は870馬力の瑞星12型エンジン装備。胴体は金属製骨組みに羽布張りで、2個のフロートは全金属製、木製2翅のプロペラをつけていた。大津航空隊は20年5月まで複座水偵の練習航空隊であったが、その後大阪警備府に所属することになった。写真は1945年10月17日の撮影である。

E7K2 recon. seaplanes at Otsu Air Station, 17 Oct. 1945.

フォッケウルフ Fw189

ドイツ軍用機写真集 ①

Focke-Wulf Fw 189

視界の良い機首を持つ双胴のフォッケウルフＦｗ189は、Ｈｓ126の後継として造られた戦術偵察機。1939年から44年のあいだに試作機を含めて846機が生産され、偵察や軽爆撃、連絡や患者輸送機として主に東部戦線やバルカン戦線で使われている。アーガスＡｓ410Ａ-1エンジン（465hp）双発の双胴機。視界は良好で手頃な直協機ではあったが、最高速度が330kmそこそこの低速では敵戦闘機のえじきになる機会が多く、次第に第一線を退いて、1944年春には訓練学校へ格下げされている。

最初の量産型Ｆｗ189Ａ-1につづいて、防御火器を強化したＡ-2、複操縦式の練習型Ａ-3、20mm機関砲を装備した偵察・直協型のＡ-4のＡシリーズのほか練習機のＢシリーズ、襲撃型のＣ型、水上機型のＤ型、エンジンを換装したＥ、Ｆ、Ｇなど各種の型が少数機試作されている。133ページから135ページの写真はすべて東部戦線に配備されたＦｗ189Ａ-2である。

1941年から生産に入ったＦｗ189Ａ-2はつぎつぎに実施部隊に送られた。1942年９月、東部戦線の戦術偵察部隊は317機の偵察機を保有していたが、そのうち９個偵察連隊の174機はＦｗ189Ａ-1とＡ-2であった。

写真上２枚はＦｗ189Ａ-2に装備される110ポンドＳＣ50爆弾。本機は主翼下にこの爆弾４発を装備した。そのほか武装は両主翼付根に7.9㎜ＭＧ17機銃各1挺、コクピット上部と胴体尾部にそれぞれ7.9㎜ＭＧ81機銃を２挺ずつ装備した。３人乗りのコクピットは、前後方・上方とも透明ガラス張りで、主翼部分は下方の視界をさまたげたが、前後縁に突き出た機首と尾端部から直下方をのぞくことができた。

F6F ヘルキャット

F6F-5 Hellcat fighters of USMC in training flight. Took off from Oafu, Hawaii, 1945.

鮮明なすっきりした写真で偲ぶ「2次大戦のアメリカ軍用機」。今回はグラマンＦ６Ｆヘルキャット。136ページからこのページは、ハワイのオアフ島エバ基地から訓練に飛び立った海兵隊のＦ６Ｆ-5。南国のさんさんたる陽光をあびて、広い洋上に思いっきり翼をのばす、すばらしいスナップである。もはや勝利を手中のものとした1945年、自信にあふれた"レザーネック"の翼というところ。全面グロスシーブルーの機体が青空に浮きあがって見える。136と137ページ写真の中央の機体は、主翼下に5インチ・ロケット弾用ラックをつけているのに注意。機首に巻かれた帯は、グロスインシグニアホワイトである。

FINNAIR's second airliner, Junkers G-24, purchased in 1926.

エアラインの翼

(Photo by FINNAIR)

フィンランド航空 ②

1923年11月1日、ヘルシンキ市会の音頭で誕生することになったのが、今日のフィンランド航空の前身「エァロO／Y」。5年後に社名が変って、今日につづく「FINNAIR O／Y」となった。1924年、創立のころの装備機は先月号にも紹介したユンカースF-13。同機によってフィンランド航空が1924年中に運んだ旅客の総数は 269人という。

〔上〕1926年頃の装備機。前方のＫ-ＳＡＬＥ機はユンカースＦ-13、後方のＫ-ＳＡＬＣ機は同年に１機導入したユンカースＧ-24。Ｇ-24は低翼単葉全金属製の最初の３発民間旅客機。310hpのユンカースＬ５エンジン×３で、全幅29.90ｍ、全長15.69ｍ。写真の機体はフロート付きであるが、陸上型は自重が4,300kg、離陸最大重量6,500kgで、巡航速度は182km／hr、航続距離1,300km、実用上昇限4,700ｍという性能。乗員３人、乗客は９人乗りであった。

〔左〕ユンカースＧ-24とその乗員たち。北国の空を飛ぶものものしい飛行服。

〔下〕1932年に導入したユンカースＪu52／３ｍ。同機になって、乗客の収容数は15人となった。

FINNAIR enriched its services with Ju52/3m, purchased in 1932.

写真で分析する
零式輸送機

Photos from the L2D2 Transport Handling Manual.

不朽の名機ダグラスＤＣ-3の日本版、零式輸送機の細部をご紹介しよう。ご承知のように零式輸送機はＤＣ-3を昭和飛行機で国産化したもの。金星43型装備の11型（Ｌ２Ｄ２）金星53型に換装して主翼なども補強改造した22型（Ｌ２Ｄ３）、荷物輸送機（Ｌ２Ｄ３）の三つのバリエーションがあったが、以下の写真は当時の「取扱説明書」に掲載された11型で、これまであまり発表されなかった機内各部の珍らしいものもある。

〔上〕「説明書」の冒頭に載せられているＬ２Ｄ２の側面写真。完成したばかりの機体で、カウリングと日の丸以外は未塗装。外板のつぎ目が良くわかる。

〔左〕主翼の中央翼部分。中央に四つの燃料槽収納部があり、前方２カ所には795ℓの主タンク、後方には781ℓの補助タンクを２個ずつ収納する。

国産した零式輸送機11型は、原型ＤＣ-3のライト・サクロン・エンジンを複列14気筒の三菱“金星”43型、990hp／2,800m）に換装したが、原型に優る高性能を揮している。乗客21席の人員輸送型で、日華事変後半ら太平洋戦にかけて、西南方に拡大した海軍戦線の補輸送に地味な役割りを果している。11型は昭和15年か17年11月まで生産がつづけられ、71機が納入されていた。

〔下〕Ｌ２Ｄ２の正面写真。〔右〕主脚のクローズアップ。脚は前方に引きあげられ、ナセル内に収納されるが、込まれた状態でも車輪低部はわずかに頭を出していた。翼の前車輪の寸度は1,130×425㎜、タイヤ空気圧は3.2～3.5kg／cm²であった。車輪は２本の緩衝支柱のあいだに着され、引込みは油圧駆動。その２本の緩衝支柱と後支柱、それを連結するリンク用構桿など主脚の機構がよくわかる。２本の支柱は前方に折れ曲がり、後方支柱を軸にして車輪を引きあげる。

〔上〕主翼フラップ部分のクローズ・アップ。フラップは前縁応力外皮構造で羽布張り。写真は全開の状態を示すもの。

〔右〕尾輪。尾輪の寸度は550×220mm、タイヤ圧9.5−40kg/cm²、回転支柱、叉状金具、オレオ、尾輪固定装置などから成り、回転支柱を中心に360度回転する。車輪の中心部は、オレオ最圧縮と最伸状態の場合では約33cm上下に移動する。

〔左〕3列配置の座席が並んだL2D2の客室。客室は防音装置を施し、今日の旅客機なみの立派な内張りをしたもので、通路と床にはじゅうたんを敷いていた。床は取りはずし可能な合板を用い、単列と複列の座席は床板を通して胴体床受材に固定していた。各座席側面の壁には灰皿、読書燈、呼鈴などが備えられており暖冷房の装置もついていた。天井中央には4個の天井燈があり、手摺りと帽子棚もあって、エアラインで使われているDC-3と変りない客室艤装である。のちの22型では、この艤装はだいぶ簡素化された。

〔上左〕機内のトイレット。床は水密合板、ゴム製の敷物をしており、排水孔もつけられている。洗面器には上部に見えるように11ℓ入りの取りはずし可能な水槽がついており、これより水を供給する。便器は洗浄のために取りはずし可能。

〔上右〕客室後部左側にある調理棚。上方貯蔵箱4個、醤油びん6個、食器棚3個さらに食糧貯蔵箱4個と雑品入れ場などがそなえられている。右側中央部に「廃物入」の文字が見える。

〔右〕エンジン・ナセル下面に装着されている滑油冷却器。冷却器内を通過する空気量は、手動および自動調整器を使って、自動的に調整することができる。

〔右下〕中央翼内に収められる燃料タンク。140ページ写真でおわりのように、前方に主タンク2個、後方に補助タンク2個が並ぶが、写真は794ℓの右側主タンクである。